たい、重ねて言う、間違いのないように」

と、内地の混乱は想像を遙かに超え、荷物の上に百名が乗った車両へ他からまた押し入つて来る。出入りは窓からで、乗降口は押しでも入れない、外の手摺りにぶらさがっている。なるほどなあ；理解とも諦めともつかぬまま辛抱するしかなかった。

少しづつ人が減つた。夜十時ころ、下関に着き車両切離しの停車、互いに再会を誓いながら別れの言葉になつた人も多い。九州方面と別れて一路山陽線を東へ、午前三時半ごろ広島駅通過、夜明けの市内を見て驚愕した。一面の大焼野原。その凄惨さはニュースによる想像を遙かに超えていた。

昭和二十一年八月、東京に向かう途中、九時間臨時停車で市内を眺めた時の記憶に残っているものは、つぶれかけた「ドーム」の残骸だけが、わずかに残るくらいで他には何も無い。明石のホームには鉄骨の建物が崩れたまま放置されていた。あれを見、これを見ながら無条件降伏への道をたどらざるを得なかつた状況が、改めて脳裏に一つずつ詰め込まれて行く中を、我

が家には午後二時半ころ着いた。

役場へ報告に行き、三年十カ月の死出の旅路は終わった。時に六月十三日午後四時、葉山村より一緒に入団の四名中（志願兵一人）他の三名はいずれも白木の箱で先に帰つていた。終戦の日に亡くなつた者もいる。三日後に霊前に無言の対面をした。

思いもよらず 我一人

不思議に命永らへて……

終戦満五十年を迎え往時を偲び、犠牲となられた方々の御冥福をお祈り申し上げますとともに、飽食時代、大消費時代を一考しなければと思ひます。

北方・オホーツクの海は波荒く

愛知県 佐久間 千鶴夫

舞鶴港を出港して進路を北に一路北上し、青森県下北半島・海軍の要港大湊に投錨したのは、昭和十七年十一月の天気晴朗な早朝であった。第一水雷戦隊の最

新鋭の特別高速艦駆逐艦「薄雲」の実戦配備の処女航海の記念すべき日である。

時局下の日本海軍の編成は、第一〇第四の艦隊を連合艦隊とし、山本五十六閣下（中将、後に大将・元帥）の指揮で、四海の海でその威容と機動力を発揮し鼓舞してきた。

それとは別に第五艦隊は、重巡「那智」を旗艦（小西要少将）に「木曾」「摩耶」の二隻（軽巡）、第一水雷戦隊「薄雲」「叢雲」後に二隻の駆逐艦が加わる。この編成で日本の北の海、千島列島海域の防備の任に当たった。その基地は大湊防備隊港であった。また、北海道室蘭、小樽も重要な艦隊補給油の寄港港であった。連合艦隊のミッドウェー、ダッチハーバー両作戦のミッドウェー、以来、日本海軍は、その機動力の低下は急速に進んだ。しかし第五艦隊は別で、十八年、十九年にかけて、アッツ島の玉砕まで、キスカ島、アッツ島の守備隊の食糧・資材の運搬には、五艦隊は特攻隊となつて全力投球した。

特に第一水雷戦隊は大戦誌の一ページを飾るもので、

最大戦速三五ノット（陸上七〇キロ）の高速は、その力を発揮した。食糧を搭載してアッツの投錨地に突入して、機関始動のまま、三〇ノットで荷揚げを済ませ、病人らを受納して離岸するという小型艦船並みの神業を二、七〇〇トンの駆逐艦がやってのけるのである。荷揚げ中敵機の襲来もしばしばで、時には航行中に敵コックピットという双胴水上偵察機に捕捉され、約二、〇〇〇メートルの上空に煙幕の輪を張られる。

その煙輪を目標に敵機の襲撃となる。荒れる海を最大戦速で煙輪からの脱出を計る。脱出に失敗すれば蜂の巣を棒で突いたごとく、敵機の襲来である。荒れる海も時には味方となり、着弾視野を狂わせてくれる。

カムチャツカ半島沖のコマンドルスキー海戦はただ一つの北方での交戦記録である。明け方に敵艦隊と遭遇し、砲戦となるも荒天のため双方被弾し大破した艦もだが、自力航行で寄港地大湊に帰港した。次第に戦局は悪化し、ついにアッツ島は玉砕した。

この期に私は荒天候の中、艦の悪循環能で肺浸潤に、後に結核をわずらい、大湊病院に入院、退艦を余儀な

くされる。私を退艦させ直ちに出港した「薄雲」は、その後、キスカの戦史上で天佑ともいえる無血撤収作戦に参加し、大いに戦勲を挙げる。

戦後の「北方海域で日本海軍はかく戦へり」の放映の中でキスカの撤収場面の映像を見た。正に実録そのものである。私たちが現地にも、ありし日の姿を目の当たりに見た情況そのもので、濃霧の中、機関の音を最低に落とし、艦長以下艦員一体となりキスカ島周辺に点在する岩礁地帯を蕭々と島に近づき、守備隊との連携プレーのもと、一兵をも残さず、岩礁とのトラブルもなく撤収に成功した記録は、正に天佑であったと思う。現地に作戦行動をした者の知る実録である。

想像を絶する悪条件の中、北の守りはわが双肩にありと、日夜活躍した戦記は、他の戦績とは全く比べものにならないと、北の海の天候のごとく日の目を見ぬものが多い。五艦隊の活躍は表に出ることなく忘却されがちな作戦でもあった。また、戦歴で忘れることのできないもの一つに天候との戦いもあげねばならない。北方特有の酷寒と吹雪、氷柱で連航に支障を来たし荒

波のしぶき、大ハンマーを振るい、ロープで体をしぼり、波しぶきを浴びながら打ち砕くのも航海中まれにみる良き日に行うが、これも内地では想像もつかぬものである。

荒海との戦いは、日夜も分かたぬもので、夜間当直の交代でも甲板を洗う大波を一本のロープを手で操り、迅速に行うが、実に運を天にまかすもので、大波の間隔を測り、防寒服で体の自由もままならぬ身で失敗はわが身の死につながるものであり、正に一本のロープは命綱そのものである。オホーツクの海は牙をむき出し荒れ狂う白熊で、三、〇〇〇トンの特駆でも、実に大海原に漂う一枚の木の葉に等しい。艦首が海中に没入すれば、次に艦尾はスクリュウが飛行機のプロペラと化する。空転の振動は荒海にあえぐ難波船のもので、艦が割れるかと大音響で吠える。

ついに悲しい悲劇が起きる。その日は吹雪の舞う荒れ狂うオホーツクの夜の海に夜間当直の交代のときに起きた。後部居住区より艦橋見張りに向かう交代要員、白河兵曹その人です。経験も多い兵曹もいかんせん、

荒波の前では実に無力であつた。一瞬間の間に波の中に姿が消えた。同僚の差し出す手もあらばこそ、実に無情の風は、波は彼をひっさらつて行つた。煌々と探照灯を照らし、荒れ狂う海を右往左往し、数時間の探索も遂に打ち切り、艦長の短剣を餞に艦員黙禱と「海ゆかば」の合唱の内に水葬礼で彼を送つた。

実戦も怖い、荒波も怖い、「板子一枚下は地獄」との古人の言そのもので、私の七十有余年の人生の忘れることのできない体験となりました。

第五艦隊の寄港地、投錨地

齒拇舞群島、幌筵島、利尻島、留寰夷島、礼文島、羅臼島、オングル島、択捉島、アツツ島、キスカ島、占守島、国後島、

その他

舞鶴港 第四鎮守府

大湊港 防備隊、軍の要港

国後島 千島列島前線基地

占守島 列島最北端の守備隊基地